
徒然と情性

スケープゴート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

徒然と惰性

【Nコード】

N8734M

【作者名】

スケープゴート

【あらすじ】

休日の父の壮大だけど解決しない悩み（笑）

(前書き)

タイトルほど厳めしいものじゃありません

徒然ないものほど簡単に複雑なものはない。

現に、この夏。

七月の半ば、今年猛威をふるった梅雨は、多大な犠牲の末に収まり黒雲を山向こうまで漂わせていた空は現在抜けるような青をしている。

正午を過ぎた時分、照りすぎる太陽は頂点より微かに西の方へと傾げて地上へと光を注いでいた。

若葉とはもう言えまい。芽と呼ばれる過程を終えた青々とした葉は、生気を溢れさせ零れるほどに眩しい光を吸収して生ぬるい風に揺られている。大きな木の影は、いい感じに遮られた太陽の光が躍るように揺らめいているだろうと思わせる。

私の実家は築五十年を過ぎた古い家だった。

いや、実家と言っても他の土地に住んでいたりマンションを借りたり家を建てたりはしていないのだから、現在住んでいる家とは違った方がいいのだろうか。

砂利を敷き詰めた広い庭、隠居した両親が余った土地で作っていた田んぼを耕すための機械を置いている小屋。隣接する小屋と家を繋ぐ風の通り道を抜けた先にある畑と化した裏庭。

土地の広さと家の広さだけは自慢できる我が家。

いまどきの家のようにシンプルでスマートな外見をしているでもないのだが、私は実を言うとこの家を気に入っていたりする。

「わん！」

「ただいまー！！」

「おう、おかえりー」

私の足元に寝転がっていた犬がピクリと首をあげてひと鳴きすると、細い道路に面した表の庭の砂利を踏みつけて末娘が帰ってきた。

小学六年生のふみ。赤いランドセルは走るふみのリズムに合わせて上下に揺れる。

おとなしくもう一度寝そべって、尻尾を一度だけ揺らした愛犬の風太を気にせずに、脇に置いた缶ビールに手を伸ばした。

半分ほどの量が残っていると思われる缶の重さに、また一本追加かな、と喉の渴きを確認した。

小屋と家の間の風の通り道のような場所には、影になるように上にトタンの板が乗せられており、今のような夏場になると両親が莫^た薩^{さつ}を張り付けた台を置く。

表から裏に、または裏から表に吹き抜ける風がちょうどいい涼みになり、休日の私はどこかに出かける予定がない限り大体の時間をそこで過ごした。

今も、会社から久しぶりの有給をもらい、のんびりと枝豆をつまみにビールを飲んでいた。

足元には伸びきった風太が、腰を下ろしている台の上には湯通しした鮮やかな緑色の枝豆と飲み干してしまった缶ビール。ちなみに、我が家の枝豆は冷凍ではなく裏の畑から収穫したものだ。

「おおい、ふみー。冷蔵庫から缶ビールを二本取ってくれー」

「はあ？」

心底から嫌そうな言葉に内心そこまで嫌がるか、と思ったが何も言わずに根気よく粘る。

「いいじゃん、そのくらい」

近づいてくる足音と大きくなってくる声が、呆れたような色を含み始めたのを感じた。

いや、あきらめか？

「じゃんっておやじのくせしてー。はいはいって。どこにあんの？」

「一番上の扉の方」

「お、と？あー、あつたあつた」

冷蔵庫を閉める音がして、通路に面する裏口が開いた。

「はい」

「おー、サンキュー」

極力出ないような感じで腕を伸ばしたふみの手に握られた缶を一本ずつ受け取った。

プルを引いて、いい音がした缶に口付けて、音を立てて泡を啜る。

「はー……」

いい感じにぬるく心地いい風が切りはなく、強弱をつけて通り過ぎる。ここがあれば、扇風機を吹かせて家に閉じこもるよりも快適だ。「わん」

「おお風太。お前も飲むか！」

首だけを起こしてこちらを眺めたキャンディに、笑いながら飲んだ缶ビールを近づけてみる。

開いたプルに黒い鼻を近づけて、ふんふんとひくつかせて匂いを嗅いだキャンディは、鼻を鳴らして顔をそむけた。

「あー、お前にもわからんか、このうまさか」

残念だ、と笑ってもう一口飲んだ。

台所の小さなテレビから、賑やかな話し声が聞こえる。おそらくふみが付けたんだろう。

座っているところから見える、表の庭の大きな柿の木を、なにをすらでもなく眺める。

私の父が、この家を造った時に買った木だ、と言っていたからすでに五十年は生きている木だ。毎年、夕焼け色のような渋柿を実らせる。

緑の葉に覆われた柿の木は、白い雲に覆われ始めた青空の手前で葉を照らしながら風に揺れている。

ここで、ふと、思い至った。

私は今のままでいいのだろうか、と。

妻は近くの百貨店でパートをしているが、朝早くから私のための弁当を作り家事の手を抜くことはない。二人いる子供たちは、どちらも来年卒業を迎え、来春には新たな環境での生活を得ることになる。いまテレビの前で大口開けて笑っているだろう娘も、新たに生徒を

迎えるという公立の中学校の受験を受けると言い始めた。

中学三年の息子は、D判定の高校を受験するという。あいつは元から要領が悪く、私立の判定も悪い。夏休みも目前と言うのに、本人のやる気は見えない。

私はこのままでいいのだろうか。

この不景気。地方の小さな下請け会社。回ってくる仕事の量も減った。不安を感じて、退職金の多い時期に辞め、職を変えると去っていった仲間も多い。

ただの情性。

辞めたとして、いまからどこへ行く。

中途半端な年齢と学歴、なんとなくだけれど確かに会社で積み上げてきた経験。妻から言われたどこへ行くつもりという言葉、まだまだ金のかかる子供が二人と年老いた両親。

私はこれらの全てを背負って、なにをすればいいのだろうか。

なにか、変わらなければいけないのだろうか。このままで、いいのだろうか。

「わん！」

ハツとした。

伏せて、うなだれるようになっていた体の上体をあげると、風太が穴を掘っていた。

「おとーさん。ねえあたしさあ欲しいものがあるんだよね。だからお小遣い上げてよ」

台所から甘えたようなふみの声が聞こえる。私から遠ざかり始めたふみの、久しぶりに聞く甘い声だった。

「おー、父さんじゃん。ただいま」

裏からは自転車を押してこちらにやってくる息子のまさとの姿。

「今日さ、久しぶりに部活なかったんだよね。だから早い」

小屋に自転車を止めて私の座る台の上に腰掛ける。水泳部の部長としてやってきたまさとは小麦色に焼けた肌をしている。まさとの方から吹いてきた風に汗のにおいが混ざっていた。

「おとーさんってばー！おーこーづーかーいいー」

「はあ？おまえ帰ってたのかよ。ただいまって聞こえたら返事くらいしろよ」

「ばかじゃないの。聞こえなかったのー」

「ばかつて！兄に向って！」

「ばーかばーか。だいたいお父さんだつて言つてないし！」

「父さんはいいんだよ、酔ってるっばいし家の中にいないし」

「変ないいわけすんなよ！」

家の中と外とで言い争いを始めたふみとまさと。風太は穴を掘るのをやめ、掘った土の上に横になって舌を出していた。

「お、かあさんじゃね？」

「あー！おかあさん！」

砂利をタイヤで踏む音がして、淡い黄色い軽自動車が車庫に止まった。

家の中から椅子を勢いよく擦る音がして、どたどたと足音が遠ざかる。

「なんだよあいつは」

不機嫌そうに顔をしかめて、台から腰を上げて裏口から家上がったまさと。

かかどが踏みつぶされて汚れた指定靴が並ぶことなく散らかった。なんだ。

と思った。

いつもいつも変わらない、休日のような穏やかさ。

私はいまの一連の何気ない過去に当たり前の心地よさを感じている。このままでいい。

とくに深く考えていたわけではないが、そうだな、変わらないままでいい。

裏の畑と隣の家の境にある笹林が大きく揺れてさわやかな音を立てる。

何気ない心地よさ。

それこそがちょうどいい。

飲み干せていないビールの缶を取って、飲んだ。

表面は水滴で濡れて、中身は何となく抜けてぬるくなっていた。

ああ、これはもう一度冷蔵庫で冷やさなければ飲めたもんじゃない。

徒然なるままに。

日々、なんとなく感じるものほど簡単で複雑で、しかも幸福なものはない。

陽が落ち始めた、微かに白く煙り始めた夏の空にそう思った。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8734m/>

徒然と惰性

2010年10月22日00時54分発行